

# 植えてみたらわかる！？

## 糸魚川市立中央保育園（新潟県糸魚川市）

[5歳児]

[『畑の神様』から手紙と謎の種が届くという方法にした意図]

子どもたちがぐっと引きつけられ、ドキドキワクワクと心が動くような導入として考えた。またドキドキワクワクと心が動く経験をした子どもが、友達に思わず伝えたくなくなったり、嬉しさや不思議さを友達と共有したりすること、そして、共感し合う友達とのかかわりも大切にしたいと考えた。



### 場面1：5月中旬、『畑の神様』から手紙と謎の種(枝豆・トマト・オクラ)が届く

「いつもウサギのお世話をしてくれてありがとう。花の水くれもしてくれてありがとう」という手紙の言葉に、子どもたちは「畑の神様はいつも見ててくれるんだあ」「どこにいるのかなあ？」「空にいるんじゃない？」「畑の神様だからきっと土の中だよ」「でも土の中で手紙書けるのかなあ」と友達同士会話していた。子どもたちはいつも頑張っていることを見ていてくれる存在がいる嬉しさを感じたり、見たことのない『畑の神様』を想像してイメージを膨らませたりしていた。封筒の中からそっと種を出すと、子どもたちから歓声上がる。子どもたちがどんどん保育者に近付いてきて、種を覗き込む。その姿を見て保育者は、子どもたちに近くで見て、触れて感じたことをどんどん伝えて欲しいと考え、チームごとに種を皿に置いていく。種を見て、触れて、匂いをかいで、子どもたちは「トマトの種に形が似てる」とか、「匂いがキウイみたい」とか、「種の真ん中の線みたいのところから芽が出てくるんじゃない？」など、感じたこと、気付いたことを伝え合っていた。

### 場面2：種をカップに入れてラップをかけ、子どもたちがいつでも見たり、調べたりできるように設定する

子どもたちが友達同士数人で集まって野菜の本や図鑑を見ている。1ページずつめくりながら、『畑の神様』から届いた種と見比べている。A児「これは…違うなあ」B児「じゃあ、これは？」A児「こっちの方がちょっと大きいから違うよ」と見比べて、気付いたことを伝え合っている。枝豆のページになり、A児が「あっ！！これ！！同じじゃない？」と気付いた。C児「似てるね」D児「僕、家で枝豆育ててるよ」保育者「そうなんだ。Dちゃん家の枝豆の種はこれと同じだった？」D児「う～ん。似てるような…」A児「じゃあ、枝豆かもね」と子どもたちは期待を膨らませる。

### 場面3：子どもたちは考えたり調べたりしたことを話し合う場を設定する

子どもたちは種をいろいろ調べてみたが、はっきりとはわからない。「どうしたら、何の種なのかわかるのかな？」と保育者から投げ掛ける。すると子どもたちは「植えてみたら何の種かわかるかもしれない！」と考えを出してきた。そこで植えてみようということになった。保育者の提案で、3種類の中で自分が植えてみたい種の一つを選んで植えることにする。その後、水くれをして子どもたちから自然に「応援しよう」と言う声があがる。子どもたちは昨年、トマトとピーマンを苗から育てた経験がある。その中で野菜が育つには水と太陽と応援が必要だということが子どもたちの中にしっかりと入っている。保育者が「どうやって応援する？」と聞くと、子どもたちは「大きくなあれ、大きくなあれ、パワー」で止まり、考えている。そして「パワー種！」と応援していた。中には「大きくなあれ、大きくなあれ、パワーちび種！」と言う子どもたちもいた。子どもたちがそれぞれ自分の種を応援して話すうちに、枝豆はシロ種、トマトはチビ種、オクラはクロ種という名前に決まっていた。

その後の様子： 育てている種ごとに6～8人で集まって気づきを伝えたり、不思議に感じたことをみんなで考えたりする場を作る。会議という難しい言葉に子どもたちが敏感に反応し、喜んで使いたがることを予想してタネ会議という名前にした。



葉っぱに穴が空いていることを発見した子どもの話から、穴を開けたのは、青虫・ナメクジ・カラスのどれかではないかと、最初のタネ会議で話題になる。その後、栽培物の観察をし、タネ会議を重ねることで「ナメクジが開けた」とわかる。

### みどころ

子どもたちは、畑の神様から送られて来たものは“種”で、「花や実がなるのではないかと」、今までの栽培の経験などから期待感をもっているため、「何の種だろう？」と考えたり調べたりしています。このように興味や実体験があることで、「種を植える」という発想が子どもたちから出てきました。そして、栽培物に注目しているので、その後葉っぱに起こった異変を追求することにも結び付いています。